
テルシオ = ヴォン = スタードの標的

J . I . A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テルシオⅡヴォンⅡスタードの標的

【Nコード】

N9843Y

【作者名】

J・I・A

【あらすじ】

魔法文明の発達した異世界。ジペンゼ州の賞金稼ぎテルシオⅡヴォンⅡスタードは、同じ賞金稼ぎで憲兵団の大佐に転身した裏切り者の男の暗殺依頼を受ける。

ーギルドにやってくる非公開の依頼は魔法文字の最後の文字へギアでランタ

テルシオ「デル」セトは紀元前三世紀、ドラゴンと契約して戦乱の中部地方を治め、イーサファルト王国を建国した偉大な英雄だった。大体そんな内容の昔話を両親から聞かされた事があったが、ずいぶん小さい頃の話なのでほとんど覚えていない。

親父は膝の上に俺を乗せて、よく中部の昔話をしてくれた。俺の一族は中部地方の出身で、けっこう名のある騎士の家系だったそうだ。その五代目の領主だが一人の女をかけた決闘なんてしようもないもので命を落とし、主を失った親父の一族は凋落して東部に移住してきたのだという。騎士の子孫である父親はいまだにその出来事をひきずっていたらしく、俺に一族再建の夢を託していた。親父もそのまた親父に同じ夢を託されていたのだ。俺の名前『テルシオ』は、そんな中部地方の英雄からつけられた。

遠い国の騎士道を徹底的に叩き込み、目が過敏症の呪いにかかった時は大陸中の医者という医者を探した。手塩にかけて育てられてきたが、夢は結局果たせぬまま、無惨な形で断たれてしまうことになった。ある日、首に賞金のかかった悪党どもが屋敷に押し寄せてきて、見掛け倒しの俺の屋敷からわずかばかりの財産と命を奪って逃げたのだ。

俺は一人東部の大都会に取り残され、その後かなりゆがんだ道を歩いてきた。奇麗事ばかりが通用する世界じゃないってのはその時すでに学習していた。それでも俺の中に植えつけられた騎士道の精神はいつも曲がらなかった。

常に公平であれ、常に感情のバランスを保て。いつも父親の教えを忠実に守って、常に騎士らしくあることを心がけていたつもりだ。しかし、十世紀にもなると、さすがに騎士のスタイルもずいぶん様変わりしたものだ。

鈍色に輝く銀の剣を腰に提げていたのは遠い昔、魔石工学の最盛

期である昨今では、つや消しクリームを縫って反射光を抑えた魔法小銃が主な武器だった。餌代のかかる馬の代わりに《飛空艇》を乗り回して宙空を飛びまわり、戦いの場は砂埃の舞い上がる荒野から漆黒の塔が乱立する夜の大都会へと移る。好んで飲むのはワインから夜襲を恐れてその不味さで目の覚める缶コーヒーへ、そして一对一の純粹な決闘よりも、向かいの塔の屋上からの狙撃を好んだ。すなわち暗殺だった。

東部アーディナル共和国の大工業地帯ミッドスフィアのと真ん中で、俺は魔法使いの塔の屋上にコーヒーの空き缶を置いた。缶にプリントされた光の精霊ピサが静かにほほえんでいて、その隣には魔法使いの塔にありがちなフーピエの像があった。

フーピエは鳥面猿身の水の魔物だ。コウモリの翼で夜空を音もなく飛び、長い手足を絡めるように屋根を伝い歩き、猛禽の目と嘴を光らせて下界の人々の残りの命をじつと見定めるといふ。

一体何の目的があるのかは分からない。寿命を縮めるでも、魂を食らおうとしているでも、地獄に連れて行くでもない、ただ、死に行く者とそうでない者を、じつと見定めているという。そこに深いロマンを感じる。こうして塔の下に向かって銃を構え、標的を待ちかねているとき、俺の隣には常にフーピエがいた。

頭に巻いた黒バンダナは蒸し殺されそうな夜でも外せなかった。俺の髪の毛の色は暗闇でひどく目立つ。愛用の革ジャンもひどく蒸れるが、これはげん担ぎのためだ。俺の視界は高性能の暗視スコープによって狭められ、オペラ会館の前に停車した一台の高級車の姿を捉えていた。

無駄に長い車から次々と降りてくる女たちは、スパンコールドレスに身を包み、どれも俺にとっては向こうの世界のまばゆい笑顔を浮かべていた。俺の耳には届かない挨拶を交わし、俺には見えない聴衆に手を振っていた。銃声が轟いたときも逃げるのに必死で、きつとあの笑顔が張り付いたままに違いない。人間、本当に危機が迫った時はどんな表情をしたらいいのか分からなくなるものだ。

一台、二台、三台。劇場の前には黒塗りの高級車が代わる代わる訪れ、数十名を運べそうな車からほんの数名の人を吐き出し、音こそこちらには聞こえてこないが、その度に周囲では大量のフラッシュや惜しめない拍手に莫大なエネルギーが浪費されていた。

俺は引き金に指をかけ、かけていた指をゆっくりと外す、そしてたまに汗でずれてくるメガネを直す、たったそれだけの静かな運動を繰り返していた。それでも俺の内側で浪費されているエネルギーの方が遥かに莫大だった。

五台、六台、七台。違う。違う。また違う。焦りや苛立ち、不安がこみ上げてきても、それを鎮める強い精神力は狙撃手としての重要な素養だった。これには幼い頃の騎士道の勉強が大いに役立つている。いったん引き金から指を外して、メガネのすわりを直し、呼吸を再三整えると、また指をかけ、暗視スコープの向こうの世界をじっと見つめる。延々とその繰り返しだった。何十年も飽きずにここを見下ろしているフーピエの精神と、俺の意識がゆっくりと重なっていった。

胸ポケットに入れた無線機が、ざざざ、と時おり静かにざわめく標的の動きを追っていた仲間から最後の報告が入って数分、いくらなんでも到着が遅すぎる。見逃したか。焦る気持ちをおさえ、それでもあと十分と、ゆっくりと呼吸をしていたとき、無線機の向こうから聞こえてきたこの世のものとは思えぬおぞましい声に、俺は一瞬息が詰まった。

「ぴいぎやあああああああ！ いやああああつ！」

俺は無線機を胸に抱きかかえたまま、塔の縁から後方に飛び退いてその場にはいつくばった。

声の外に漏れないよう革ジャンを使って押さえ込んだが、奇声は布の下からびりびり響いてくる。ほとんど無駄な抵抗だった。懐に手をつ突っ込み、つまみを捻って音量を下げた。耳の中で残響がわんわんと鳴っている。心臓がばくばく鳴っている以外、周囲に変わった物音はしなかった。

右よし、左よし、逃走経路確保、よし、ほどなく確認を終了して、無線を可能な限りすばやく耳にあてがい、短く吠えた。

「スタイ！ 静かにしろ、今事中だ！」

「ターチィ〜（ターチィテルシオの東部読み）。えっ、えっ、えっ、えっ。さっきの見たあ〜？」

そつちの様子が見えた訳ないだろ、俺は超能力者か。喉まで出掛かったツツコミが俺の狙撃手としての素養で引っ込んだ。

最悪な事に、こいつは今俺のパートナーなのだ。スタイ、十七歳、金髪碧眼、スタイル良し、本名不詳、天真爛漫で気分屋で放浪癖がある自称賞金稼ぎの女だ。

こいつをパーティに入れるのには端から反対だった。ドジでグズでマヌケで他の奴の足を引っ張る事にかけては天才だったからだ。お前はいいから大人しくアニメでも観て情報収集をしていると言いつけていたのだが。

「ドックはどうした！ 側にいないのか！」

「ウソゼったい見てるわよ、どの局もさっきからおんなじニュースばかりやってるんだからあ〜っ」

「だから、今は事中だっつってんだろ、テレビなんて見てねえよ！ おい、ドックはどうした、ドックに代わってくれ！」

「ねえ聞いてよあ〜、それがさあ〜、ひどいのあ〜、ついさっき番組が中断してさあ〜、いきなりニュースが流れてさあ〜」

どうやらこの女、こつちの話を聞くつもりは毛頭ないらしい。この状況で大した度胸である。俺は心臓に鍼を打ち込むような心地で正座し、この高速道路を横断するカメのようなはらはらする会話に父親に教わった不屈の騎士の精神を総動員してなんとか耐えていた。「イーサファルトの王女様があ〜、急にご病気になっちゃったんだつてえ〜」

「ああ、そりや大変だなあ」お隣の国の王女様の心配なんかどうだつていいだろ！

「そうなのよあ〜、それで、それでさあ〜。さっき見てたドラマが

臨時ニュースに切り替わっちゃってえ。もお、解決編だったのよ超楽しみにしてたのよ。それでね、それでね、主人公が容疑者を全員集めて犯人のトリックを解説してただけどさあ。それが超びっくりしちゃってえ。

『この密室をつくった犯人は（中略）』

そしたら、そのタイミングで急に仲間から連絡が入ってきてえ。それ聞いてドックもどっかにいっちゃったあ。もう私どうしたらいいのかわかんない（泣）」

俺は今の会話から必要事項だけを抜き出した。どうやらドックの元に他の仲間から緊急連絡が入って、あいつはこの脳天気な女をひとり残してどこかに行ってしまった、という事らしい。

ドックの個人的な能力は買っているのだが、反面チームプレイになると極端に大雑把になる。こいつに任せてどうするんだ。どうやら今、俺が頼る事ができるのはこの女の状況説明能力だけのようにだった。

「どんな連絡だったんだ。要点を三つ以内にまとめて喋ってくれ、三つ以内だ。お前と話している間にも、標的がくるかもしれないんだから早く！」

「ふえええ、イーサファルトの王女様がご病気になっちゃったんだってえ。」

「それさっき聞いた、あと二つだ！」

「そうしたら、そうしたら、今夜王女様のために開かれる予定だったパーティがみんなキャンセルになっちゃってえ。ああそうだそう言えばビリー、ジェニム様も明後日のコンサートキャンセルしちゃったみたいなのよ。もう私超楽しみにしてたのに。」

再び話が振り出しに戻ってしまったようだった。俺はフープエの隣から向こうの様子をちらちらのぞいていた。俺の希望としてはこのまま速やかに無線を切って、他の事など一切考えずに静かにフープエの隣にたたずみたかったのだが。

「それでジェニムさまがお手紙書くらいから、私も王女様にお手

紙書こうかと思うんだけどお。そうしたら賢者の塔のゴルベール主席がお見舞いに行く事にしたんだってえ」

「切るぞ、用事がないんだったら切るぞ」

「待つてよお。そうしたらゴルベール主席がお見舞いするから補佐官のカンパリオンと一緒にいて行く事になつてえ。オペラ鑑賞会キャンセルしちゃつてえ。えつ、えつ。そうしたら他の取り巻きの人もみんな次々とキャンセルしちゃつてえ。あんたの標的もキャンセルしちゃつたんだってえ」

俺は速やかに通信を切った。

つまみを硬くひねりすぎて指先が白くなつていた。沸騰した脳みそが目からこぼれないよう、そのまま固く眼を閉じ、空調のように一定量の息を静かに吐き出す。

あの野郎め。

腹の熱が次第におさまつてゆくのを感じ、何とか立ち直れそんな気がしてくると、不意に荒々しい足音が建物の奥から沸きあがってきた。

統率の取れた足音に、がちゃがちゃと鉄の鎧が擦れあう音が混じっている。この足音は憲兵だ。こりやまずい、数が多すぎる。フーピエの台座に隠れてやりすごすと、銃を持った憲兵達がドアを蹴破つて屋上に現れ、方々をライトで照らしはじめた。

「クリアーっ!」「クリアーっ!」

ああっ、くそっ。なんで俺がこんな初歩的なミスを。油断した、仲間のせいだ、なんていう言い訳はとうに捨てた。かつて伝説の賞金稼ぎが俺に残した名言がある。

危機に陥つたときは余計な感情を一切捨てる。賞金稼ぎの仕事をやつて行く上では、不慮の事故なんてのはいくらでも付きまってくるものだ。今の事態をどうやって乗り切るか、それを考えることだけに全てを集中しろ。

集中、集中、集中……。時に英雄の言葉は、こうして何度も俺の命を救った。足音から判断しただけでも憲兵は十数人。出入り口に監視役も見張っているだろうから軽く見積もって十四、五人。逃走経路はふさがれていると考えていいだろう。

唯一の通信手段である無線機を力強く握り締め、怯みそうになる自分を叱責した。この仕事を請け負ったときからタダで済むとは思っていない。怯むんじゃねえ。頼むぞ、スタイ。本当に、本当に頼むぞ。俺は深く息をはいて、ゆっくりと無線機をつまみをひねった。かちつという音と共に無線に魔力が戻り、蚊の鳴くようなちいさな雑音が聞こえてくる。

幸運なことに、そのとき通信に出た相手はスタイじゃなかった。力強い、覇気のある女の声が胸ポケットを震わせた。

「テルシオ、ドックがそっちに向かったわ」

首をめぐらすと、フーピエの翼の向こう、不気味なキャンドルみたいに立ち並ぶ塔の間を、黒い小型の船が猛スピードで飛んできた。船体は三日月型に反り返っていて、四本の足に取り付けられた細長い浮力管が力強い金色の光を放っている。

二人乗りがやっつとという小さな席に座っているのは、全身を灰色の毛に覆われた狼頭の男だった。ネイビープールの獣の顔にゴーグルが嫌に似合っている。そいつは立ち往生している俺に向かって牙を向き、無言で塔の先を指差した。

ドック！ 来たか、やっぱり頼りになる男だ！

夜の闇と暑苦しい革ジャンが俺を護ってくれることと、連中がいきなり発砲しないことを信じて、俺はフーピエの影から一目散に飛び出した。

「止まれっ！」

俺を発見した憲兵達の制止する声が響いてきた。警告を完全に無視してそのまま一気に屋根を伝い降り、接近してくる飛空艇とタイミングを合わせて夜の街に飛び出した。

「うおおおっ！」

片手で運転席の屋根を掴むと、中に乗り込むのも待たずにドックは急発進した。両手を伸ばして振り落とされないよう屋根にしがみつき、窓から両足をつき込んで強引に進入した。ネオンサインの看板が危うく俺を弾き飛ばすところだった。

あのな、急いでいるのは分かるが、乗り込む前にちょっと死ぬところだったぞ。口には出さないがそういう顔をしていると、ドックは犬くさい顔をして背後を指差した。

「追っ手がいる、後ろを見るな」

ルームミラーから確認すると、背後に黒い飛空艇が二、三台、岩石のような大男達を左右の船べりからはみ出さんばかりに搭載して俺達を追跡している。どうやら通報したのはあいつらみたいだ。

「バクバの連中か。撒けるか？」

ドックは鼻で笑った。

「あんなトロい連中に追いつかれていたら賞金稼ぎはやっていけねえよ」

ドックの飛空艇は轡を引っ張られた馬のようにがくと急停止し、塔と塔の間の彼しか知らない未知の構造を俺に見せてくれた。船の幅はぎりぎり、視界は暗く、得体の知れない黄色のガスが充満していた。

ドックはそんな路地を見据えながら操縦桿を捻り、魔力機関にさらに強大な魔力を集中させていた。

「掴まってるよ、ダウンタウンを突っ切るぜ」

俺はその興奮気味の横顔に、はじめて薄ら寒い恐怖を覚えた。

*

東部のしがない賞金稼ぎだった俺がこの大仕事を引き受けたのは、先月の頭の事だった。俺は東部アーディナル共和国の東にあるジペンゼ州に暮らしていた。

大工業地帯ミッドスフィアの少し外れにある、機械の部品で出来た

ゴミ溜めのような州だった。ジペンゼは昔から奇抜な発明をする機械工が多い、というか、変人じみた発明家が多いことで有名で、俺の住む町も多分にその例に漏れなかった。

最初に空を飛ぶ船を発明したスーベイという変人も、この岬で何百機という試作機を飛ばし、そして失敗してきたという。

《冷たい時代》と呼ばれる帝国の占領時代の真っ只中に、「船が空を飛んだら、素敵じゃないかい？」というスローガンの下、ただひたすら夢を追い求めていたロマンチストだ。連合軍がその飛空艇の性能に目をつけ、帝国と戦う為にその船を使わせるよう要求したのに対し、最後まで首を横に振り続けたという変人である。

終戦から三十年、スーベイのあまりの変人ぶりに憧れた変人たちが何百人もここに集い、自作の船を空に飛ばしてはその変人ぶりを披露していた。ついにはジペンゼに世界中から変人たちが集結して世に名高い飛空艇レースまでおっぱじめる始末だった。そうして出来たのがこのデュルス岬、通称《スクラップ岬》だ。掘っても掘っても空飛ぶ船の残骸が出てくる、ジペンゼの名所である。

地中海に突如出現した機械の城みたいなデュルス岬には、飛空艇の他にも正体不明の魔石機器がごろごろと転がっていて、ネズミやタヌキや魔物、果てはそれに類する人の道を外れた者達がうようよと住居にするようになっていた。

レジャー施設にでもなつていそうな景勝地だったが、このゴミの撤去にかかる費用の試算がいくらになるか分かったものではなかったし、もしそんな計画が持ち上がるものなら俺たち先住民が黙ってはいなかっただろう。自然は大切にしなければならぬ。

もちろん、俺たち専門の賞金稼ぎなんてのも人の道はずれた生き物に過ぎない。ただ、ちょっと希に収入がある事と、連中よりもかなり見晴らしのいい場所に住んでいるという点では大きく異なっていた。

その日も天気は良好だった。飛空艇のぶうーんというプロペラ音が、雲ひとつない青空に響いていた。俺は愛用のメガネをかけたま

ま、寝癖だらけの頭でぼんやりとベッドに腰掛け、頭のスイッチが入るのをしばらく待っていた。

教習場の船の騒音ならもう慣れてしまったが、いつ聞いても慣れる事のない音というものもある。助けを求める人の声はその一つだ。「きゃあーっ！ 助けてえー！ 助けてえーっ！」

「騒ぐんじゃねえ！ さつさと金を出せ！」

騒ぐなと言われても被害者はぎゃあぎゃあ騒ぎ続けていた。たぶん子供の声だろう。誰かがドラマでも観ているのかと思ったが、複数の男が同時に声を張り上げていて、何を訴えかけているのかさっぱり聞き取れない。この辺はドラマとは違って本物っぽかった。

賞金稼ぎの巣窟として名高いこの賞金稼ぎアパートに、好きこのんで近づくような悪党はめったにいない。せいぜい気の弱いホームレスが弱い者いじめをするぐらいが関の山だろう。

喧嘩なら仲間内で好きなだけすればいい。嬉しいニュースもない世の中、憂さ晴らしぐらいしたくなるのは自然だろう。けれども子供を標的にする奴は許せない。それが俺の自然だった。俺の髪は生まれつき銀色だったが、染めようとは思わない。やはり男は自然でないといけない。目立って仕方ない髪をぼりぼりかきながら、茶色いフレームのメガネを外してテーブルの脇に置いた。

壁に立てかけてあった白と黒二本の銃のうち、白銀のショットガンを手に取り、裏路地に面した窓からひよいと身を乗り出した。

雨どいに手をかけ、路地に狙いを定めて発砲した。ずどふっ、銃弾は窓辺に掲げてあったランプに見事に命中する。ゴミ箱の周りに分厚いガラスの破片が散らばり、群がっていたホームレスどもが身をすくめる。

「やべえ、ターチだ！」

連中は俺を見つけると、金属の義手や義足をきしゆきしゆ動かして逃げ出していった。俺は銃を肩に乗せてそれを見送った。

ふむ、こんな事ばかりやっているから俺も結構有名になったもんだ。残ったのは散乱したゴミと、ゴミ箱にはまって抜けなくなっ

ていた被害者が一人、口をぽかんと開けて俺をぼんやり見上げていた。上着ははだけていて、片足だけゴミ箱から突き出して動けないでいる。中性的な顔立ちだったが、たぶん男だ。ちよつとがっかりした。

*

俺が助けた少年は、飛空艇の免許を取得しにジペンゼにやってきたそう。教習所は大陸南岸にもいくつかあったが、この時期は台風がきたり時化があったりしてしょっちゅう休みになってしまつたため、待ちきれない連中が途中から地中海のジペンゼにやってきたりする。

名前は聞いた瞬間に忘れてしまったが、どこにでもあるような平凡な名前だったというのだけは覚えていた。迷子になったというので教習所が見える道まで案内してやって、その辺のパスタが旨い店で昼飯をおごってもらった。

「ありがとう、本当に。いや、本当に助かったよ」

そいつは俺がフォークを振つてもういいと言つまであと百回くらい礼を言った。

「あんたみたいな人つて居るところには居るもんだね、やつぱり世の中つて広いや。スクラップ岬を通つたら近道かと思つただけど、全然だったね。本当にぜんぶ機械の部品だけで出来ているんだね、あの岬。人も建物も地面も、いや、あんたは別だと思つけどさ。あ、いや、深い意味はなくてさ。というか、本当はもつとお礼をしなきゃいけないと思つただけど……」

俺は少年の話より目の前のシーフードパスタの方に意識を傾けていた。この辺の料理は昔からシーフードが主流だった。けれども今は大抵の魚介類を輸入に頼っている。放置された魔石機器の影響で近海にミュータント化した魚が出没するようになって、漁師の数が激減してしまつたんだそう。

「頑張つて免許取りな」

あんまりしつこいとかえって機嫌を損ねる事もあるという事を、この少年は学ぶべきだろう。だが俺が教えなくともそのうち自然に学ぶだろう。色々説明するのも面倒だったので、それだけ言っておいた。少年は少し黙った代わりにほうと息をついて、パスタを食う俺を夢中になって見ていた。あいにく俺は少年が模範にするべきヒーローじゃない。パスタに夢中になっているただの賞金稼ぎだ。時間が迫ってきているのか、少年はすぐに席を立った。

「あんた、きつと有名な賞金稼ぎになるよ。リゲル＝シーライトみたいに！」

俺はフォークをぴたりと止め、皿の上でよじれたパスタを食い入るように見つめた。

ドアベルがからんからんと鳴って、少年は去った。

首筋をぬらりと撫でてゆく冷房のうなり声を聞きながら、俺はそのままぼんやりと固まっていた。

*

賞金稼ぎは恨みを買う職業だ。

恨みを買う職業らしく、ミッドスフィアの某所にあるギルド本部の二階は、全ての窓に暗幕が張られている。

壁は防音、外から人の動きが分からないように細心の注意が払われ、月に二回盗聴器の搜索が行われる。俺はギルドマスターの書齋に訪問して、今年に入ってからもう何度目かの嘆願をした。

「頼む、すぐにまとまった金が必要なんだ。俺に《ギア・ランク》の仕事を請け負わせてくれ」

ギルドには、所属している賞金稼ぎの中でも一部の者にしか公開されない非公式の依頼が存在する。具体的な内容はほとんど知られていないが、そいつは決まって途方もなく高額で、そしてそれに釣

り合うだけ危険だ。

ギルドマスターは暗い書齋で革張りの椅子に腰掛け、葉巻の辛い煙をくゆらせていた。

今は引退しているが、俺がここに来た頃のギルドマスターは凄腕の賞金稼ぎだった。仲間からの信望も厚く、その手で一体何億という賞金を稼いだのかは分からない。だが、彼の顔もやはり影が落ちたように暗かった。右目の古傷がひどく印象的な老人だ。

「若造が首を突っ込む世界ではない。信用が大事な仕事だ」

「昔は十代でギア・ランクを請け負った奴がいるって聞いたぜ」俺はギルドマスターに食って掛かった。「俺じゃ不足なのかよ？」

「時代が違う、当時とはな」

「いったい何がちがうってんだ！」

俺は机を拳で叩いた。思った以上に大きな音が出たが、マスターはびっくりとも反応しなかった。俺の威勢のよさは今に始まったものじゃない。孤児になった頃からここに入りに出たりして、面倒見の良いいマスターは俺の親父代わりみたいなもんだった。

志望動機が両親の仇を討ちたいだなんて可愛いもんだ、俺が何をしでかしてもギルドマスターは怒る様子もなく、ただ静かに闇を、えぐられた右目で俺の怒りなんかよりももっと深いところにある闇を見つめていた。

ああ、そうだ、この闇だ。

ガキの頃から賞金稼ぎをはじめて十年、俺にはどうしても越えられない壁があった。

俺には見えない地獄のようなものを、あの男も背負っていた。

「戦争だ。お前と私が共有できない、唯一のものだ」

*

ギルドの一階に戻っても、明るいのには窓から差し込む陽射しだけだった。

顔なじみが安酒をあおっているところを見ると、今日も銃を扱う予定はなさそうだった。俺は誰に挨拶されることもすることもなく、待合室の定位置に腰掛けた。

見渡すと街は平穩無事で、事件らしい事件がほとんど起こらなくなっただけだった。現にギルドにやってくる依頼件数は今月に入っただけで減少し、全盛期の半分にまで落ち込んでいた。

入り口付近にコルク材の依頼掲示板が設置されているのだが、今日も張り出されている依頼は、発電所に住み着いた迷惑なタコだの、下水道に紛れ込んだ巨大ネズミだのといったミュータントの討伐依頼ぐらいいった、ミュータントの討伐は苦勞させられる割りに実入りが悪いし、他のお使いみたいな依頼は新入りの為に残しておく決まりだった。

要するに、この掲示板の内容こそが今の東部の状況を表している。世の中が平和なことだ。それはそれで確かにいいことだが、今の俺はそうも言っていない。俺は新聞を開いて、隅々このほうの小さな記事を見つめたまま、

口をぽかんと開けていた。建材に使われている魔石の粉塵が人体に悪影響を与える可能性についてのコラムの脇に、ついさつき免許を取りにいったはずの少年の姿が載っていた。

終戦後まもなく行方が分からなくなってしまうていた伝説の勇者の剣。それを、この少年が西部の広大な荒原から拾ってきて、つい昨日連合軍の本部にまで届けたというのだ。

昔、自らも勇者の剣を探していたという年配の賞金稼ぎが噂していたのだが、発見者にはピア・ランク三つ分ぐらいの破格の報奨金が与えられる予定だったとか。まさか、その発見者がこんなひ弱な少年だったとは思ってもよらないじゃないか。俺もつい先日までは、そんな大事なものが紛失していたという事すら知らなかった。無理もない、俺が生まれるよりずいぶん前の古い事件だった。

参ったな、かっこつけてないで、助けたお礼くらい貰っていればよかった。けれども今更かっこわるいし。どうしようもない事で煩

悶しながら、結局俺も他の連中の輪に入って、ちびりちびりと安酒をあおるのだった。

「おい、しけた顔してんなよ。世の中暗いニュースばかりじゃないぞ、今月はリゲルの奴が賞金稼ぎを辞めたらしいじゃないか」

賞金稼ぎというより気前のいい武器屋といった風貌の小太りの男が、ジョッキを振り回しながら大演説をおっぱじめた。

「今まで俺が狙っていた高ランクの仕事は根こそぎあいつに持っていかれてたからな、今度こそ誰にも邪魔されずに仕事ができるってもんだぜ、がははは！」

赤ら顔のオヤジの演説を聞きながら、俺は鼻で笑った。どちらかというにあいつに助けてもらった回数の方が多いくせに。

「よしなって、誰にもあいつの代わりはできないさ」

窓辺のテーブルを一人占領し、小銃を愛しそうに磨いている男もそう言った。こいつがエア・ランク以上の賞金首をしとめたという話は聞いたことがないが、ただ女にもてたいという一途な思いだけで賞金稼ぎをやっている見上げた根性の男だった。この不景気でも身に着けた宝石類はきらきらと輝いている。絶対に手放さない。軽薄そうな見た目によらず、かなり性根の座った男だった。

「リゲル」シーライトはこの賞金稼ぎギルドに残る『伝説』になっただんだ、もう誰にもあいつを越える事はできないのさ」

そう言って、まつげの長い片目をつぶってみせると、周りの連中から同意の言葉と失笑が同時に漏れた。

「ああ、確かにあいつは伝説だ」

「誰もあいつの代わりはできねえな」

確かに。あの男「リゲル」シーライト」は俺達には真似の出来ない伝説をいくつも築いてくれたもんだ。

リゲルの賞金稼ぎとしての腕前を認めていない者はこの場に一人もいなかった。本来なら思い出したくもないライバルの話であるはずが、誰もがにやにやと思いつき笑いを浮かべている。

いつもカウンターの席で一人座っていたダークエルフの剣士が、

肌の色と同じ褐色の鎧を鳴らして振り向いた。そして妖精らしい尖った耳を何か言いたげに触りながら、残念なニュースを伝えるような感じで言った。

「聞くところによるとリゲルは憲兵団の大佐になったそうだからな。今後も一人で仕事を持っていくのは変わりないと思うぞ」

賞金稼ぎたちは一瞬会話を止め、呼吸を忘れてお互いの顔を見渡した。その言葉の意味が俺達の脳髄に浸透してゆくのに大分時間がかかった。やや間があつて、言葉の意味を理解した俺達は腹を抱えて大爆笑した。

「賞金稼ぎが、憲兵に？　おいおい、なんだよそのジョークは」

「知らないのかお前、そりゃ、あいつが始めた新手の詐欺に決まってるだろ！」

「あつははは。まったく、よくやるよあの親父は」

俺達は呼吸がつかなくなるまで笑い転げた。妖精は細い眉をしかめて、そんな俺達を不思議そうな顔で見ていた。

「本当なんだがなあ……」

「いやいや、あの男の賞金稼ぎとしての腕前は認めてやるよ。確かになものだ。けれども気をつける、あいつは大嘘つきだ」

そう、ついこの前なんか、「伝説の剣を手に入れたぞー！」とかいう大法螺をふいていた事があつた。それがマスメディアを使った巧妙なやり口で、アーディナル全土が騙され、連合軍でさえこいつの口ぶりを信じ込み、まんまとひっかかって彼を賞賛していた程だった。

実際にテレビで観ていた俺達も仲間の活躍ぶりに興奮して、本当にあいつが伝説の剣を手に入れたものとすっかり信じ込んでしまっていた。だが、自伝『リゲル』シーライトはいかにして英雄の剣を持ち帰ったか？』がベストセラーになって、世界的に売れに売れ、ぼろ儲けしたら、突然リゲルは失踪した。実はこの新聞に載っている例の少年に成りすましていただけだとわかった時は、アーディナル全土がひっくり返るような騒ぎに陥った。

とまあ、普段からこんな感じの痛快な事件を起こしてくれる痛快なオヤジだった。だから、そいつがいきなり東部に戻ってきて「大佐になったどー！」という話を聞いたときも、こいつはまた新手の詐欺を思いついたに違いない、と俺達は腹をくくっていたんだ。少なくとも、今度はもう本を買わされないように、財布の紐をきつく縛っておかないとな。

色黒の剣士にもそう忠告してやると、分かったような分からないような複雑な顔をして了承してくれた。妖精には人間という生き物の複雑さがよく飲み込めないのだろう。

しかし面白い冗談を考える奴がいるもんだな。不景気な昨今、みんな久しぶりに腹の底から笑ってやったという顔をしていると、天井に吊るされた板状の投影結晶の中で、メガネをかけたニュースキヤスターがパソコンを覗き込むような真面目な顔をして、こう言った。

「イーサファルト王国からテンニールコンタル州にお越ししてまでもなく、体調不良が心配されているマリー王女様に関する情報がいりました。

ただいま連合軍第五憲兵旅団『広報官』……失礼しました、第五憲兵旅団『リゲル』シーライト大佐』による緊急記者会見が開かれております。現場に中継を繋ぎます」

あれ？ あいつ今なんて言った？ まあいいや、俺も昼間っからちよつと飲みすぎたみたいだな。などと思いつながら、ちよつと画面に目をやると、薄い板状の投影結晶はやたらとマイクがのさばった机を映し出していて、その中央になにやら大量のフラッシュを浴びる、見覚えのある顔の男を映し出していた。

波打つ黒髪に、中部人特有の彫りの深い顔。落ち窪んだ優しげな目は手元をじつと見つめ、サファイアブルーに輝いていた。うつむいていたので、とがった顎が余計に鋭く見える。不精髭が似合う、ハンサムで熊のように大柄な男だ。

「あれ？ リゲルじゃないか」

「なんであいつがテレビに映ってるんだ？」

ふいに俺は胸騒ぎを覚えた。いや、だってさ、とんでもない詐欺を働いて行方をくらましていた男が、とつぜん全国放送で大量の記者に囲まれて記者会見を開いているんだぜ。謝罪とか、逮捕とか、そんな単語ばかりがよぎるのは当たり前じゃないか。

周りの賞金稼ぎたちの笑い声も、その内ぴたりと止んでしまった。「おいおい、マジかよ」

さらに不可解なことに、一斉に焚かれるフラッシュを浴びながら、そいつは緑色の軍服に身を包んでいたんだ。憲兵団の軍服だった。

しかも緋色のマントまで羽織っていて、俺達にはもはや、どんなクラスの官職の格好をしているのかさえ分からなかった。

けれども、それは紛れもなく、俺達のよく知っている賞金稼ぎ、リゲル「シーライトそのものだったのだ。

「なんだなんだ、また新手の詐欺をおっぱじめるつもりなのか？」

「前回もこんな感じだったよなあ、とつぜん伝説の剣を手に入れた、とか言い出したんだっけ？」

「賞金稼ぎを辞めて俳優に転向したみたいだな、結構サマになってるじゃないか？」

仲間の悪ふざけを面白がるような、そんな囁き声も聞こえていたが、それも誰かのある一言でぴたりと止んだ。

「おい、これ……バレたら洒落にならないんじゃないか？」

そうだ、確かにこれは、本気でやばい。

剣を持ち帰った無名の少年に成りすましていたのならまだしも、

今度は、憲兵団の大佐に成りすまして全国放送に再登場するなんて、一体何を考えているんだ、あのオヤジは！　こんな詐欺を働いて、連合軍が黙っている訳がないじゃないか！

リゲルのオヤジは演説台に手を突くと、前のめりになり、俺達の不安をよそに軽い声で言った。

「今回はいつもより地味な登場ですまない。用意していた打ち上げ花火が無駄になってしまった」

記者団はどつと笑って、俺達はぞつと鳥肌が立った。安酒のグラスが次々と床に落ちて、バリンバリンと音を立てて割れていった。

「あの親父っ……！」

「見てられねえ、誰かあいつを止める！」

見回すと、どいつもこいつも酔いからさめてしまって、宴会で酔いすぎた奴が洒落にならない危険行為をやるうとしている現場を目撃してしまった風な顔をしていた。

ここまでずつと鉄面皮のような顔をしていた俺も、さすがに心臓が脈打ち、メガネがずり落ち、開いた口がふさがらなくなっていた。

ところが、記者団はそんな不思議を意に介さず、当然のように彼に質問をぶつけはじめたんだ。

「王女様の御様態について、《大佐》はどのような事をお聞きでしょうか？」

二人称が普通に《大佐》になっていた。ありえねえ。

五十近い年齢の割に、リゲルの風貌はかなり若かった。その顔は心なしかやつれており、今にも涙をこぼしそうな悲しげな表情を浮かべて、今度は天井を見つめている。　　気をつける、あいつが目

に涙を浮かべたら、詐欺が発動する兆候だ。

「つい先月の事です。皆さんもすでにご存知の通り、私が伝説の剣の事件に『ある形で関与していた』最中……つまり、英雄の剣をこの東部へと『安全・確実に運ぶために進んで身代わりになっていた』時の事でした……。」

私は一度故郷に立ち寄って、イーサファルト王室に上がる機会を賜ったのです。残念ながらその時、王女様にお目見えする願いは適いませんでしたが、その時点では、ご病気の事はまだ何も聞かされておりませんでした……。

王女の母君であらせられる前王妃には大変お世話になっており、ご息女の王女が東部にお越しになられると聞いた時から、今日までの時間は実に待ち遠しく、またささやかな不安もあり、とても長く感じられるものでした。今回お目にかかれなかった事を、非常に残

念に思っております」

王女のご回復を、心よりお待ち申し上げております。そう言っ
て頭を垂れたリゲルに、また大量の無駄なフラッシュが浴びせられる。
記者達は手元に顔を伏せて一斉にメモを取っている。

おい。今の話の中にいつたい何を真面目に書くことがあるんだ？
記事になるのか、今の？ 今のはこいつの遍歴と心境を語っただ
けの、ただの自己アピールに過ぎないじゃないか。ひよっとして俺
たちは、何か滑稽なコントを見せられているんじゃないのか？

「もしお会いできたときには、王女様とどのようなお話をなさる予
定だったのでしょうか？」

余計な質問をする記者がいた。金で雇われていたに違いない。い
ずれにせよ、リゲルは内心ほくそえんでいたに違いなかった。目に
熱い涙を浮かべ、震える息を吐き、ここぞとばかりに演技力のリミ
ッターを外して感情を爆発させた。

「ああっ！ 王女は、さぞお聞きしたかった事でしょう！ どうし
て私が愛する祖国イーサファルトを捨て、遙か東の国で戦う道を選
ばなくてはならなかったのか。」

なぜ私が今日まで、賞金稼ぎのような人の道を外れた生き方をし
なくてはならなかったのか……！ 私は、私が経験した壮絶な戦い
の全てを王女に打ち明け、そして、ただ許しを乞いたかった……！
熱い心情を吐露する大佐に向かって、再び無駄なフラッシュが焚
かれる。誰か、誰かあの詐欺師の暴走を止めてくれ。

詐欺だ、全部詐欺だ。終戦直後はまだ世の中が荒れていたから賞
金稼ぎの実入りがよかったただけだ、本人がそう言っていたのだから
間違いない。

リゲルの自己アピールは一度始まるともはや歯止めが利かなか
った。ブーケみたいに束になったマイクを引きちぎると、壇上の持ち
場から離れて、全身がカメラに映る位置に立った。どおおっと記者
たちからどよめきがあがる。会見場を右に左に自在に移動しつつ、
放っておくと壇の上に両足で立ちかねないほどの大げさな身振りを

交えて延々と語り続けた。

「なぜ？ と、皆さんも不思議にお思いの事でしょう。退役後、一介の賞金稼ぎに過ぎなかった男が、どうやって大佐の地位にまで登り詰めたのか？

世間には様々な憶測が飛び交っています。この私が連合軍の勲章を一度辞退した英雄だったのではないか。あるいは賞金稼ぎの世界に送り込まれたスパイだったのではないか。

ですが、それらはどれも真実には遠く及ばない。私はごくありふれた元軍人の、ごくありふれた、ただの賞金稼ぎでしかありませんでした。

忘れもしない。あれは人生の全てを賭けて挑んだ、失われた英雄の剣を搜索する旅でのこと……！」

もはや王女様はまったく関係なかった。それでもなお巧妙な語り口に、誰一人としてその間違いに気づかない。気づいていても誰も指摘しようとしめない。すげえ。逆に俺の中には、リゲルに対する尊敬の念さえ生じ始めていた。こうしている間にも、全世界のお茶の間にリゲルの自己アピールが延々と流され続けているんだと思うと、正直感慨深いものさえあった。

「王女様は、ぜひお聞きしたかったことでしょう！ そのとき私がどのような決断をしたのか！？」

伝説の剣を死守したほどの偉業を成し遂げたにも関わらず、なぜその後突然姿を消すという行動を取らざるを得なかったのか！

壊滅しかけていた憲兵団を復活させ、悪の組織と闘い、数々のマフィアを逮捕に追い込み、今日のように平和な東部を、どのようにして掴み取ったのか……！」

リゲルは口惜しそうに顔をゆがめて、やがて、思い切ったようにマントの中から分厚い一冊の本を取り出し、演壇にどんと置いた。

「その全てが、この、自伝第二巻！ 《リゲルII シーライトは如何にして憲兵団大佐になったのか？》に、詳細に記録されているっ！

いよいよ明日、全国一斉に販売開始だっ！ よろしく！」

リゲルはカメラ目線になり、全てのフラッシュをはじき返すよう
なきらーんというまぶしい笑顔を俺達に向け、白い歯を光らせた。
ほ、欲しい！ ちくしょう、なんて商売上手なやつなんだっ！
これは買いだ！ 今すぐ買うしかないっ！ 急げ、書店に！
……と、内心思ったが、どうやらそう思っていたのは俺だけみた
いだった。

見渡すと他の賞金稼ぎたちはみんな眉をひそめて、伝説の賞金稼
ぎを尊敬するどころか、むしろ憎々しげな眼差しを画面に向けてい
たのだった。

「ふん、憲兵に成り下がった裏切り者が、ふざけんな」

「どうせ、あいつお得意の法螺話しか載ってないんだろ？」

賞金稼ぎたちは声をそろえて、一同がっはっはと笑っていた。

俺もみんなにあわせて、周囲にはほとんど見分けのつかない苦笑
いを浮かべていた。

けれども、メガネの奥の両目だけは、しっかりとその本の表紙を
捉えていたのだった。

翌朝、こっそり書店を覗いてみると本は完売していた。ギル
ド直営のショップにも寄ってみたが、平積みのコナーの周辺にリ
ゲルの顔がでかかど載ったポスターだけが残されていた。ちくし
よう、賞金稼ぎどもはみんな嘘つきだ。

どうやら伝説の男リゲルは本当に憲兵になってしまったらしい。
道理で世の中が平和になってきているはずだ。あいつは賞金稼ぎだ
った頃と同様、大佐になってもきつと成功してのける事だろう。

そして稼ぐだけ稼いだら、とつぜん何の前触れもなく去るのだ。
あいつの自伝は今作もベストセラーになるのは疑いの余地がない。
それに引き換え、俺はいつまでもスタート地点でうるうるしている
小物に過ぎなかった。

学もない、職もない。あるのは腕に覚えのあるこの両手と銃のみ。
さて、これから一体どうしよう。肩を落としてぶらぶら町をさまよ

っている所へ、黒塗りの車が徐行しながら近づいてきた。

二度クラクションを鳴らした。どうやら俺に用があるらしい。車は俺と併走するように速度を落として、スモークガラスをゆっくりと下げた。

中から骸骨のような男が、ぬばあつ、と顔を覗かせた。

「おい、こんな所でぶらぶらしていいのか？ 小僧^{ホーイ}」

こいつがルオー・ブルトルート^トバクバだ。バクバは割れた唇を舐めながらにたにたと笑っていた。参ったな。今の俺はこいつに大きな借りがあった。本来ならば借金返済のため、いまごろ賞金首の搜索に駆けずり回っていなくてはならないはずだった。

日ごろ狙撃手の精神を培っている俺は、借金取りに出くわした時も落ち着いた態度で対処することができた。少なくとも、顔にはまったく感情を出さずにいられる。

「ああ、大口の仕事が見つかりそうなんだ」

有りもしない根拠を並べて、見得を切る。これもあの伝説の賞金稼ぎに教わった処世術だったような気がする。バクバは人の弱みを探るいやらしい笑みをさらに深めて、また唇を舐めた。

「ほーう、それは上出来なことじゃないか？ ユー・ノウ^{グッド}」

あー、うぜえ。うぜえこの外国語混じりのしゃべり方。

この男が俺達のギルドの不況を知らないはずはない。それどころか、こいつらは俺達ギルドの知らない情報を把握する情報屋でもあった。

バクバ一味の桁外れな情報収集能力は、アーディナルの賞金稼ぎの中でも追隨を許さなかった。

たったひとり、リゲル^リシーライトを除いては、の話だが。

「まあいい、期限までに完済^{コンプリート}して貰えればこっちは文句はないさ。先を急いでいるからこれで失礼する^{グッバイ}」

奴は窓から身を乗り出し、凶悪な笑みをたたえながら平たい鼻面を寄せてきた。

「俺達にも大口^{ビッグ・ビジネス}の仕事が到来したのさ、アイ・ビリーヴ」

相変わらず狙撃手の表情を保っている俺を見ながら、急いでいる割にはたっぷり時間をかけつつ、バクバはけたけたと笑っていた。「恨むんなら逃げた相棒を恨みな。賞金稼ぎなんざどいつもこいつも簡単に人を裏切るしけた生き物だ、簡単に信用しない方が賢明だぜ、ドンチユウ・シンク？」

俺は全身に虫唾が走る思いをしながらも、ずっとバクバに表情のない顔を向けていた。頼む、頼むから、早く俺の目の前から消え去ってくれ。

ようやく車はゆっくりと発進していった。バクバはじつと俺を見ていた。俺もバクバをじつと見ていた。スモークガラスが上がって、バクバの首を挟むトラブルを起こしつつ、連中はその場に俺を残して去っていった。

*

正直者が損をする世の中だ。

長年連れ添ってきた俺の相棒についてここで詳しく語るつもりはない。要はいつの間にかバクバに借金をして、いつの間にか俺を保証人にして、いつの間にか蒸発していたという事さえ理解してもらえればそれで十分だ。

ある日俺がアパートの部屋に帰ると、机の上に新品のメガネと三行の謝罪文を残して消えていた。くそつたれめ。

俺は日当たりのいい壁を選んで、部屋にリゲル[®]シーライトのポスターをでかでかと貼った。書店に貼ってあった宣伝用のポスターを盗んできたものだった。反対側の壁際に腰掛けて、そいつの憎々しい笑顔に向かってゴム鉄砲を飛ばしたりしていた。

リゲルは俺がこの世界に入った時からギルドにいた、先輩格の賞金稼ぎだった。俺はあいつに生き方のほとんどを教わったと言ってもいい。いつも一匹狼で、仲間とはほとんどつるまなかった。その

くせ他の連中の何倍も仕事をこなしていて、いつも誰かに憎まれていた。

あいつは他の賞金稼ぎとは、何かが決定的に違っているような気がした。それが何なのか分からず、いつも俺は頭を悩ませていた。俺が遠征をして賞金首を十件も仕留め、最年少記録を引っさげて得意げに帰ってみると、あいつは一ヶ月に二十五件も仕留めるという月間最多記録を出していた。本当は一日一件という大よそ信じがたいペースだったらしいのだが、当時のマスターから少々やりすぎだとお咎めを食らって二十五日目から謹慎していたという。それでもその記録は今なお打ち破られていない、俺達のギルドの金字塔となっている。

いくら走ってもいつこうに差が縮まる気はしなかった。そのうちあの男は俺が追いつく前にふらりと賞金稼ぎをやめてしまった。今では憲兵団の大佐だ。

「……………くそつたれめ」

本気で賞金稼ぎギルドに残る『伝説』になっちまいがった。俺は笑みを浮かべるリゲルに毒づき、もう一度ゴムを飛ばした。

*

そのまま燃料が切れたみたいに寝て、目が覚めたのは日暮れごろだった。海には縁のほうにまだ太陽の余韻が残っていて、窓の外はうつすらと明るかった。

部屋の隅で携帯の青い光が明滅していて、俺を見下ろす憲兵団大佐の顔が現れたり消えたりしていた。夕暮れにビリー・ジェニムのサクスの音色。

俺はしばしその自然な組み合わせに酔いしれながら、自然なタイミングでそいつを耳にあてがった。

「テルシオ、今すぐ書斎に来い」

俺は直ぐにでも仕事に取り掛かれる準備をしていた。銀色の髪の上から黒いバンダナを巻き、革ジャンに、黒のスナイパー・ライフルと白銀のショットガンを装備していた。

部屋に入ったとき、暗幕の細い隙間から、外の様子をじつと伺っているマスターの姿があった。その背中が、まるで今まさに外で戦争が起きているかのような耐え難い雰囲気をかもし出していた。

逆光の中を葉巻の細い煙がくると立ち昇り、熱い灰を受ける灰皿が、硬質な冷たい光を帯びていた。真夏なものにも関わらず、部屋に入った瞬間に悪寒が走った。

「二度と引き返せない道を歩む事になるぞ」

ギルドマスターはいきなりそう切り出した。もちろん何の話かは確認するまでもなかった。マスターは契約文の文言を確認するように、一言一言かみ締めながら言った。

「この取引は法的に存在してはならない。ゆえに、その存在を証明する契約書も存在しない。互いに信頼しあい、互いに脅迫しあい、互いに無謀な要求をしあう危険な取引だ。この契約を結べばお前はギルドと依頼主、双方の身を脅かす重大な存在になる。言うならば、おまえ自身が契約書となる。任務失敗、契約不履行、あるいは契約に背くあらゆる違反行為を犯した場合、場合によっては消えてもらう。消えてもらうことになる。二度と引き返せない道だ、それでも受けるか」

二度と引き返せない闇の入り口にたたずんでいたのに、俺は口ポツトみだいに平然と受け答えをしていた。

「ああ、いいぜ」

どうやら、本当の不幸ってのはこういう風にして訪れるものらしい。

借金とか、仲間の裏切りとか、親の敵討ちとか、そんな見た目も危険なものでは決してなかったんだ。

その応接室は、ギルドの地下室にあった。当然ながらこの部屋も盗聴を恐れて厳重に管理されている。窓は一つもなく、分厚い壁に阻まれて外の音は一切聞こえてこなかった。

暖色系の薄明かりの中に、その女は身動きひとつせず座っていた。琥珀色の紗の衣に全身を包み、一目でそれとわかるような異邦人の風貌をしていた。俺やりゲルと同じ、中部人の顔立ちだ。鼻筋は高く、熱線を放っているような、直視すると痛いほどの強い眼差しをしている。瞳の色はグリーンだ。耳には高価そうな赤いイヤリングをつけていて、布で顔を隠していても、その美貌と高飛車な態度はこちらにまで伝わってきた。

「名乗りなさい」

俺が向かいの椅子に座ろうとすると、依頼者は俺の動きを牽制する様に言った。どうやら椅子に座るのにも許可が要る御身分らしい、俺はポケットに手をつ突っ込んで、立ったまま返事をした。

「テルシオ〃ヴォン〃スタード」

「まあ、テルシオ」俺の名前を聞いた途端、女の目元が急に綻んだのが分かった。そして中部人は大抵こういう。「良い名です」

へいへい、光栄ですとも。と口の中で呟いた。正直、俺の名前なんてどうだっていい。俺は肩に背負った白銀の銃のすわりを直して、女の向かいの席を指し、なるべく騎士らしく丁寧に振舞った。

「座ってもいいか？」

依頼主が頷くのを見届けると、俺は背もたれを掴んでぐるりと反転させ、背もたれの上に腕を組んでどっかりと腰掛けた。相手は目を丸くしていたが、気にせず続けた。

「早速本題に入らせてくれ。俺はそこら辺の傭兵くずれとは違う。契約を軽んじたりもしないし、依頼主の命令にはその都度従う。一度依頼を引き受けるからには絶対に逃げないし、どんな仕事でもあらゆる手段を使って確実にこなしてみせる。だが、その前に言っておかなくてはならないことが幾つかあって、まず一つ目……」

俺は指を折って、言っておかなければならない事を一つずつ数えた。

「一つは、俺と依頼主との契約に対して、俺とギルドとの契約が常に優先されるということだ。くわしい契約内容はあとでおっさんに見せてもらえばわかるが、たとえば依頼主の命令であっても、ギルドの関係者に直接危害を及ぼすような命令だけは受け付けない。」

二つ目に、一度契約したら契約金を全額支払う前に契約を取り消したり、または途中で俺から別の賞金稼ぎに取り替えたりはできない。あんたが任務完了の由をギルドに伝えない限り、俺とお前の契約は永遠に続くということだ。ここまで分かるか？」

「結構」女は深い笑みを浮かべて言った。「貴方に決めました。よろしく願います、テルシオ」

俺は残りの指をもてあまして、ぴたりと固まってしまった。どうやら、いきなり俺で決定してしまったようだ。

ここまで豪胆な依頼主を見るのははじめてだった。最初は信頼のおける奴かどうか、時間をかけてじっくり吟味するもんだぜ。

「で、そう」

やはり影の仕事はひと味違う。あっさりと契約を結ばれてしまった俺は、平静を取り繕って話を続けた。

「じゃあ、俺の方も異論はないので、早速本題に入ろうか。具体的な仕事の内容を聞かせてくれないか」

「護衛です」

「護衛？」

「ええ、東部を観光する間、私の護衛をしていただきたいのです。よろしいですか？」

「ただ護衛をしてりゃいいって訳じゃないんだろ？」

ただの護衛を雇うだけなら、ギルドに賞金稼ぎを仲介してもらう必要はない。同じ金を払えば喜んで盾になってくれる奴を百人は集められる。

ひよつとするとそういつた無駄なところに大金をつぎ込む趣味があるのかも知れないが、なにかしら後ろめたい目的があるはずだった。少なくとも俺の嗅覚はそれを感じていた。

女は細い顎を引くと、再び刺すような鋭い目つきになった。

「私の護衛だけでは何か不満ですか？」

相手の脅迫的な態度に、俺は数ミリほど姿勢を正し、首を振った。

「いや、十分だ。よっぽど危険な連中に狙われているんだな」

女は何やら挑むような、試すような目つきでじつと俺の目を見ていた。

「分かりました、本当の依頼を申し上げます」

そして突然、まるで何がしかの強い念が籠った、恨みがましい目つきになって言った。

「リゲル」シーライトを暗殺して頂きたいのです。できますか」

その契約内容を言い渡された瞬間、背中の銃が今まで感じた事もない冷たさを持ったように感じられた。正直、聞かなきゃよかった、とも思った。

非公式の仕事だ、暗殺ぐらいあるだろうと覚悟はしていた。それでも標的はせいぜい仕事上のライバルとか商売敵とか、そんなものを想定していた。

だが、あまりにもデカかった。現連合軍憲兵団大佐の、暗殺。デカイ。ピア・クラスの仕事をいくつもこなしてきた俺でさえ、即座に首を縦に振るのがためらわれた。

「それはつまり、『連合軍に歯向かえ』ということになるな」

「ええ、そうなりますね」

思えば騎士はずいぶん様変わりしてしまったものだった。

帝国の支配からアーディナルを救った正義の軍に、牙をむくテロリスト、か。この俺が、テロリストに。

冷や汗が後から後から吹いてきた。悪い夢のような気さえしてきた。何かの聞き間違えじゃないかと耳を疑ったりもした。

だが、これは作り話なんかじゃない。これは紛れのない現実なんだ。『何があっても、拒否できない』それを理解して受け入れたというのが現実だ。この部屋に足を踏み込んだ瞬間から、俺はこういう事態が起こる事すらも覚悟して、足を踏み込んでいなくちゃなら

なかつたはずだ。

これが影の仕事。俺の顔にも早速影が落ちそうになった。

「詳しい事情は聞かない」それがルールだ。「あんたの素性も聞かない。早速仕事に取り掛かる」

表面上は何も考えていない風を装いながら、その実、心の中では激しく動揺していた。しばらく席から立つことさえ困難なくらいに俺は、試されている。引き金を引く指が震えた。塔の屋上で息を潜めている自分をイメージした。すると、俺の精神は再び屋上のフーピーと一致して、世界を鳥瞰する一個の石像になる。震えは収まって、俺は一、二秒ほど閉じていたまぶたを開き、落ち着いて椅子から立ち上がった。

「呼び名がないのは不便だな。とりあえず、なんか適当な呼び名を作ってくれ」

「では、『ローロ』と」

俺が眉をひそめると、女は、もう一度にこりと微笑んだ。変わった名だったので、俺はもう一度念を押した。

「ローロ？ いいのか、それで？」

「北方民族の言葉で『大きなトカゲ』、すなわち『ドラゴン』を言い表す言葉です」

俺はにやりと笑った。へえ、なるほど。この女には結構お似合いじゃないか？

ローロは俺を見ながら微笑んだまま、白い手をそつと差し出した。「では、騎士殿。夷狄いてきの征伐に、いざ参りましょう」

俺は恭しく頭を下げ、その手を取った。琥珀色のドレスがドラゴンの鱗みたいに光を放ちながら、ローロは優雅に立ち上がった。

こうして、千二百年ぶりに英雄テルシオとドラゴンの契約が交わされた。中部から遙か東の地の、薄暗い地下室で。誰にも知られることなく、静謐に。

俺の最初の影の仕事は、賞金稼ぎギルドの伝説であり、裏切り者、

そして現ミッドスフィア第五憲兵旅団大佐、リゲル＝シーライトの暗殺だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9843y/>

テルシオ = ヴォン = スタードの標的

2011年11月30日00時52分発行